

コリント人への手紙第一13章「愛の至上性」

1A 圧倒的に優位な愛 1-3

2A 愛とは 4-7

3A 決して滅びない愛 8-13

1B 廃れる賜物 8-10

2B 不完全な賜物 11-12

3B いつまでも残るもの 13

本文

コリント人への手紙第一 13 章を開いてください。私たちは前回、12 章から御霊の賜物について学んでいっています。そこで、パウロは、同じ神が、同じ主が、同じ御霊が、それぞれに異なる賜物を与えていることを強調しました。そこで、私たちはキリストのからだであり、一人ひとり各器官なのだと話したのです。そこには、相手への敬いがあり、相手への共感があり、他者のことも他人事には思えないつながりがあります。また、劣ったように見える部分も実は欠かせない部分であり、そうやっていたわり合いながら生きていくことを話しました。

そして、すべてが使徒ではないし、すべてが預言者でもなく、教師ではない。すべてが異言を語るわけではないと話しています。なぜそう話すかというと、賜物を巡って、混乱が起こっていたからです。14 章を見ますと、具体的には異言の賜物で混乱が起こっていました。このように、教会の中で、賜物を中心にして考えられると混乱が起こります。

教会が、何かの働きや賜物を中心にしていく時に、おかしくなっていきます。妬みや争い、その他の罪が出てくることがあります。例えば、預言の賜物があるとして、牧師がある女性を人々に前で、「この人の預言に聞いて行きましょう。」として、教会全体がその女性のいうことで振り回されていったということを聞きました。またある時は、聖書を正しく学ぶことこそが、リバイバルの鍵だとして、聖書の知識がすばらしいとして集まっているところが、いろいろな教会で、家庭で、いろいろな亀裂をもたらしているという話も聞いています。知識にしても、預言にしても、それを持ち上げることが、まさに「すべてが預言者ではない。すべてが教師ではない。」とパウロが言っていることに抵触するのです。

そこでパウロは、12 章の最後で「12:31 **あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。**」と言ったのです。賜物自体に、優劣があるのか？というところではありません。賜物を求める動機について語っているのです。14 章において、公の礼拝においては、異言よりも預言を求めなさいと勧めています。全体の益になるために賜物は与えられるのであり、公の礼拝で異言を語っても

人々には通じない。人々を育て上げる、理解できる言葉で、つまり預言で語りなさいと勧めます。

そこでパウロは、その動機にかかわってくる、「私は今、はるかにまさる道を示しましょう。」と言っているのです。コリントの教会に出てくる、様々な問題がありました。妬みや争いによる派閥の問題。知識の高ぶりによる、淫らな行いや偶像礼拝の問題。そして、公の礼拝において女の人々が被り物を脱いだり、主の晩餐において我先に食べたりと、混乱が起こっていました。これらの過ちをパウロが正す中で、その根底にあったのは、ここの「はるかにまさる道」でした。それが「愛」です。パウロは、偶像の宮で肉を食べる人々について、すでに「しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」と言っていました(8:1)。神に愛され、そして神を愛し、また人々を愛するということが、はるかにすぐれた道であると説きます。

1A 圧倒的に優位な愛 1-3

¹ たとえ私が人の異言や御使いの異言で話しても、愛がなければ、騒がしいどらや、うるさいシンバルと同じです。² たとえ私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、私は無に等しいのです。³ たとえ私が持っている物のすべてを分け与えても、たとえ私のからだを引き渡して誇ることになっても、愛がなければ、何の役にも立ちません。

パウロは、三度、「たとえ私が」から始め、「愛がないなら無に等しい」と繰り返して、いかに愛がすぐれているかを教えています。賜物も、また犠牲や献身も愛がなければ、全く無意味だとパウロは断言しています。私たちの人間的な感覚では、どこかいいことがあるんじゃないか？と思いますが、パウロは、「いいえ、愛というものが、それだけすぐれた道なのです。これなしには、他のことはみな無に等しいのです。」と言っています。

コリントの教会で実際に問題になっている、異言の賜物からパウロは、例に挙げています。異言については 14 章で詳しく説明していますが、これは神に献げる祈りや賛美を助けてくれる賜物です。自分の理解できない言葉で献げますが、祈りにしても、言葉にならないほどのうめきがあります。みこころが分からないから、うめくということもあります。賛美にしても、自分に与えられた喜びや平安、愛を、自分の知っている言語では言い尽くすことのできないことがあります。それを御霊が、異言という賜物で助けてくれるのです。けれども、愛がなければ、やかましい銅鑼やうるさいシンバルと同じなのです。後で、愛が、「自分の利益を求めない」というのが出てきます。自分の祈りや賛美は豊かにされますが、公の礼拝で自分の利益を求めたら、他の理解できない人々にとっては、単なる騒がしい音にしか聞こえないのです。

そして次に、「預言の賜物を取り上げています。預言は、人々が置かれている状況や状態に対して、神が語られていることを語る言葉です。それは、「人を育てることばや勧めや慰めを、人に向

かって話します。(14:3)」と 14 章にはあります。しかし、愛は、「人のした悪を心に留めない、また、不正を喜ばない」と6 節にあります。預言をする人の中には、相手に悪いことが起こるとして、自分の悪意、自分の妬みや恨みなどを、神の名によって語る人々がいます。愛から離れた預言もありますが、それは無に等しいのです。

そして、「あらゆる奥義とあらゆる知識」と言っています。「知識のことば」という御霊の賜物があります。またコリントの人びとは知識があることを誇っていました。しかし、知識は人を高ぶらせることがあります。愛は「高慢にはなりません」と 4 節にあります。そして信仰です。これも、信仰の賜物があることを、12 章にありました。「たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても」とパウロは言っていますが、イエス様が言われたのは、からし種のほどの信仰があれば、山に動けと命じたら動くと言われました。そこに、信仰に対する自慢があるように思われます。どれほど自分は信仰があるのかという自慢があれば、4 節によると「愛は自慢せず」とありますから、無意味です。

そして、犠牲や献身です。「たとえ私が持っている物のすべてを分け与えても、たとえ私のからだを引き渡して誇ることになっても」と言っています。献げること、また殉教することでさえ、もし愛がなければ無意味です。教会において、献身や犠牲がもてはやされていき、その中で、必ずしもそこまで献身することができない人々を見下したり、また本人たちが劣等感を抱いたりしたら、元も子もありません。神の恵みによる働きではなく、自分の益を求め、神から見返りを求めるような献身にさえなってしまう。

2A 愛とは 4-7

そしてパウロは、愛とは何か、愛にはどんな特徴があるのかを列挙していきます。それが、私たちが愛と考えているものとはかなり異なることに気づきます。午前礼拝でも説明しましたが、ギリシア語には、主に三つの愛を示す言葉があり、肉体的な愛はエロス。精神的、感情的な愛はフィレオ。そして、霊的な愛がアガペです。新約聖書の愛を示すギリシア語の大半が、アガペになっています。これは霊的な愛です。見返りを求めない愛、他者を思い、犠牲を払う愛です。

^{4a} 愛は寛容であり、愛は親切です。

私は、この新改訳の「寛容」という訳が好きではありません。寛容というと、いろいろな考えを受け入れていくという、もっと知的な意味になりますね。そういったものではありません。共同訳ですと、「愛は忍耐強い」と訳されていて、こちらが合っています。これは、相手が自分の願ったように応答せず、反抗的であっても、それでも相手が良くなることを願って、その人に関わっていくことを意味します。「8:1 愛は人を育てます。」と、パウロは言っていますが、人を育てる時には忍耐が必要です。相手が時に、思春期の子が反抗期に入っても、それでも忍耐して、育てていきますね。

私たちの神が、忍耐の神であることを知ることは大事です。アダムが罪を犯した時以来、人の反抗に対して耐え忍んでこられた方です。モーセに対して、ご自身の御名の栄光を示された時に、このような名でありました。「出 34:6b-7【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富み、7 恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す。しかし、罰すべき者を必ず罰して、父の咎を子に、さらに子の子に、三代、四代に報いる者である。」忍耐強く、赦すのに早い神です。

また、ここの忍耐強さは、自分とは異なることを考えている人がいて、けれどもキリストのゆえに忍耐して受け入れるという、広い心を指しています。寛容といっても、その意見を受け入れるということではなく、その人自身を受け入れて、忍耐するということであります。エペソ人への手紙 4 章で、パウロはこう勧めています。「4:2-3 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、3 平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい。」

そして、「親切」というのは、忍耐強さの後に出てくる実です。忍耐が切れて、もう結構だとして、その人を不親切に取り扱うことが多いですが、耐え忍び、そして親切にします。ペテロが、どこまで人を赦せばよいか聞いた時に、「七度までですか？」と尋ねたら、イエス様は、「七の七十倍、赦しなさい」ということを言われました。数えられるような計算できるものではなく、その人を受け入れていくという決意、決心であります。

^{4b} また人をねたみません。

妬みというのは、自分よりも優れていると思われる人を見た時に、自分自身に不安が与えられるところから始まります。徹底的に自分と同じか、それ以下にしないと気が済まない感情であり、これは恐ろしいほど、限度を知りません。どんなに、相手が身を低くしようが、その人に与えられている能力は、神の恵みによって与えられた賜物ですから、自分と同じにすることはできないのです。コラが、アロンとモーセに反抗した時のことを思い出してください。「民 16:3 あなたがたは分を超えている。全会衆残らず聖なる者であって、【主】がそのうちにおられるのに、なぜ、あなたがたは【主】の集会の上に立つのか。」分を超えているのは、コラのほうであり、神の恵みによってアロンとモーセが民の上に立っているのであり、コラもケハテ族として、幕屋の運搬などの奉仕の恵みにあずかっていたのです。

妬みがいかに破壊的で、神の恵みに真っ向から対立するかは、聖書が何度となく明らかにしています。主が、兄カインの供え物を受け入れず、弟アベルの羊の犠牲を受け入れた時に、カインがアベルを妬み、殺しました。アベルが神の恵みによって選ばれたことは、どうしようもないこと、動かせないことです。だから、自分の不安や劣等感を埋めるのは、自分自身が神に愛された者ということを知って、神によって満たされる以外に方法はないのです。けれども、それを自分の力で埋めようとするれば、人殺しさえ辞さないのです。同じように、ヤコブの息子ヨセフのことを、兄たちが

妬んで、彼を一度は殺そうとしました。そして、ダビデに主がともにおられて、ペリシテ人を次々と倒しましたが、サウルはそれを妬んで、気がおかしくなり、ダビデを殺そうとして躍起になります。そして、イエス様をユダヤ教の宗教指導者が殺したのは、他でもない妬みです(マタイ 27:18)。

コリントの教会では、「私はアポロにつく」「私はパウロにつく」という派閥が起こっていましたが、パウロは、「あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり」と言っています(3:3)。愛ではなく、賜物や働きを追い求めている結果、起こっていることです。

愛があれば、他の人が尊ばれれば、共に喜ぶはずですが。パウロは、キリストのからだに付いて話した時に、「一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」と言いました(12:26)。日本において、宣教が進まないと言われる理由の一つに、恵みというものが理解できないというのがあると思います。それは、すべてが横並び、同じでなければいけないとする考えです。例えば、思い出すのは、白血病による長期療養を経て東京五輪代表入りを決めた競泳女子の池江璃花子選手^{いけえりかこ}の事です。五輪の辞退や反対を求めるメッセージが寄せられていることを明かし「とても苦しいです」と辛い思いを明かしました。¹このような反対は、「今、コロナが流行しているのに、なぜ、五輪選手だけが自由に動けるのか。」という妬みですね。

けれども、恵みというのは、道端に捨てられた女の赤子が拾われて、優しく愛情を込めて育て上げられて、ついに、美しい女性に、さらに国の女王になるぐらいの高さに引き上げられることを意味します。自分は全く価値がないのに、そのように神が高く引き上げられるのです。ですから、人が尊ばれる時に、神の恵みを思って、共に喜びますね。

^{4c} 愛は自慢せず、高慢になりません。

自慢は愛から離れています。パウロは、コリントの人たちに「もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」と言っていますが(4:7)、これは愛から離れた行為です。自分がいかに犠牲を払ったのか、また私がこれだけの行いをしてきたのかをことさらに強調するのは、それが真実な愛ではないことを明らかにしています。ヨハネ第一に、「4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」とあります。つまり私たちの愛は、神の愛を受け、その愛に満たされて、応答しているにしか過ぎないのです。

そして、「高慢」も愛とは正反対です。神の愛は、私たちが愛を受けるのに値しないのに、愛しておられることを示しています。その恵みを受け入れるのは、自分には何も良い物がないことを知っていなければ受けられません。そのことを妨げるのが高慢です。高慢は、あらゆる形で出てきます。

¹ <https://www.tokyo-np.co.jp/article/102840>

横柄な態度にも現れますが、不安になったり、劣等感をもったり、自信がなかったりと、一見、弱々しく見える態度にも、それが高慢から来ていることがよくあります。それは、主が自分を守る方であり、主が自分に恵んでくださる方であるということを拒み、自分独りになっているからです。

5a 礼儀に反することをせず、

礼を失する態度は、愛から出ていません。相手を敬い、大事にするのであれば、失礼にあたることは避けるはずで、礼儀に反することをするのは、先の高慢な態度から来ています。

パリサイ派シモンが、イエス様を自分の家に招きましたが、その時に不道德な女がイエス様の足を涙で濡らし、髪の毛でぬぐいました。シモンは心の中で、預言者であれば彼女が不道德な女であること知っているであろうに思いましたが、イエス様は指摘されるのです。「ルカ 7:44-46 この人を見ましたか。わたしがあなたの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、彼女は涙でわたしの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐってくれました。45 あなたは口づけしてくれなかったが、彼女は、わたしが入って来たときから、わたしの足に口づけしてやめませんでした。46 あなたはわたしの頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、彼女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。」足を洗うことも、口づけすることも、オリーブ油を塗ることも、客をもてなす時の礼儀作法なのですが、シモンはそれらをすべてすっ飛ばしていました。イエス様を迎え入れても、自分がすぐれていると心で思っていたからです。

5b 自分の利益を求めず、

これが、コリントの人たちが求めていたものでした。すべてのことが許されている、という言葉が多用して、偶像礼拝を行っていました。そこでの問題は偶像礼拝もそうなのですが、他の人が同じことを行なって良心を傷つける時に、それは、その人のために死んでくださったキリストに対して罪を犯していると、パウロは指摘しました(8:12)。自由を求めて被り物を外した女性たちもそうですし、主の晩餐で自分たちだけで食べていくことも、他者を求めていないところで、愛から離れているのです。ですから、キリスト教信仰が、自分の修養のため、自分の徳が高まるため、というものだと思っている人々が多くいます。そこには、「自分」という高ぶりが潜んでいるのです。他者の利益、全体の利益、神の栄光の中にみこころがあり、そこに愛があります。

5c 苛立たず、人がした悪を心に留めず、

「苛立つ」ことは、忍耐強さとは反対の行為ですね。モーセのことを思い出します。彼は、新しい世代のイスラエル人が荒野で、不平を鳴らした時に、苛立って、岩を杖で二度打ちました。しかし、神は民に対して怒っていなかったのです。それなのにモーセは人々の前で、あたかも神が苛立つ

ているように見えてしまったことでしょう。神の恵みの栄光が輝いているのを、モーセが妨げてしまったのです。パウロが、苛立ちや怒りについてこう言いました。「エペ 4:31 無慈悲、憤り、怒り、怒号、ののしりなどを、一切の悪意とともに、すべて捨て去りなさい。」そして、「4:32 互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。」と続けて言っています。

そして、「人がした悪を心に留めず」とありますが、共同訳では「悪をたくらまない」と訳しています。自分のした悪か、あるいは他の人の行った悪かの違いがありますが、どちらにも解釈できるでしょう。新改訳のような訳し方に従いますと、これはとても重要な部分を占めています。つまり、「赦す」ということです。いつまでも自分に対して誰かが行った悪を心に留めて、それを恨みに思っていることは、愛から離れた行為です。それを過ぎ去らせる必要があります。

⁶ 不正を喜ばずに、真理を喜びます。

コリントの教会では、兄弟に対して不正を行い、だまし取っているということも起こっていました(6:8)。その町の文化では許容されていたことですが、それは愛から大きく外れていることになりました。不正ではなく、真理を喜ぶところに愛があります。ロマ 12 章では、「12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい。」とあります。愛、愛といっても、もし正義から離れているのであれば、それは、愛では一切ありません。偽善です。愛と正義が相対するものだと思っている人々が多いですが、いいえ、正義と公正があるからこそ、愛があります。

その反対に、愛は、「真理を喜びます」。真実なこと、良いことを喜びます。ピリピの人たちに、次のようにパウロは勧めました。「4:8 最後に、兄弟たち。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いことに、また、何か徳とされることや称賛に値することがあれば、そのようなことに心を留めなさい。」

⁷ すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。

「すべて」を繰り返していますね。愛とは、生活のあらゆる面での態度を指しています。これまで見てきた、「耐える」ということ。これは「重荷を負う」という意味合いもあります。つまり、誰かが罪を犯してしまったことに対して、その人が立ち上がることができるよう手助けすることです。愛は罪を覆う、ということも、ペテロ第一に書かれています。そして、「信じる」ことは、その人の最善を信じることです。すべてを望むも、良い結果になることを信じていくことです。そして、すべてを忍ぶというのは、苦しい状況の中にあっても耐え忍ぶことです。

3A 決して滅びない愛 8-13

そして、パウロは続けて、愛が、他の賜物や知識と呼ばれているものと比べていき、愛はいつま

でも残るものであることを強調します。

1B 廃れる賜物 8-10

⁸愛は決して絶えることはありません。預言ならすたれます。異言ならやみます。知識ならすたれます。⁹ 私たちが知るのとは一部分、預言するのとも一部分であり、¹⁰ 完全なものが現れたら、部分的なものとはすたれるのです。

ここは、御霊の賜物についての非常に重要な事実です。賜物は、教会にとってなくてはならないものです。賜物を御霊が恵みによって下さることによって、初めて教会の建て上げがなされます。しかし、それには時限があって、「完全なものが現れ」る時までのことです。この完全なものとは、主イエスが戻って来られる時のことです。

イエス様が、捕らえられる直前、弟子たちに愛のすべてを尽くして、言葉を残されました。それは、ご自身が父のみもとに行くこと。そして、彼らのために住まいを天に用意されて、再び戻って来られることです。しかし、その間、「あなたがたを捨てて孤児にはしません。」と言われました(ヨハネ 14:18)。それは、もう一人の助け主、聖霊を父がお与えくださると言われます。イエス様が天におられる時に、聖霊によって弟子たちと共におられるということです。ご聖霊の働きは、「わたしについて証してください。(15:26)」とイエス様が言われたように、イエスが生きておられることを証してください。その働きをするために、聖霊が人々に賜物を与えられ、イエスをあがめ、この方に仕えるようにされるのです。御霊の賜物は、このようにして与えられています。したがって、賜物は、イエスご自身が戻って来られるまでの一時的に与えられているものであり、その間、イエスのご栄光を現すべく用いられるものなのです。そして地上における教会は、主が来られるまでの一時的なものであり、教会が天に引き上げられてからは、それら賜物は廃れるのです。

ですから、賜物はとてつもなく大切なものですが、しかし、主ご自身に取って替わるようになってしまつては本末転倒なのです。これが、賜物を中心にして考えてしまうことの過ちです。一時的なものをあたかも永続するような価値を置いてしまうこと。また部分的なものを全てであるかのようにみなすこと、これが過ちなのです。

2B 不完全な賜物 11-12

¹¹ 私は、幼子であったときには、幼子として話し、幼子として思い、幼子として考えましたが、大人になったとき、幼子のことはやめました。¹² 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることとなります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。

賜物が部分的なものであるのに対して、愛が完全なものであることを示すために、パウロは二つ

のことに喩えています。一つは、幼子と大人です。これが、コリントの教会の問題でした。霊的に未熟だったのです。それで賜物中心で語り合っていました。幼子が、自分に与えられた知識で物事を考え、話し合っている姿を思ってください。その会話はとてもかわいらしいです。けれども、何もよく分かっていない幼稚な会話です。けれども、物事を知るようになった大人は、そのような会話をすることはしなくなります。これと御霊の賜物は同じなのです。御霊の賜物によって、私たちはイエス・キリストについて語り合いますが、それは、天においては幼稚なことです。まだ、一部分のことについて論じているからです。けれども、天においては、大人の知識によって論じて話すことができます。完全なるイエス様が、そこにおられるのですから。

もう一つは、鏡です。当時の鏡はガラスによって出来ていません。磨き上げられた青銅などが鏡でした。ですから、鏡に見える自分はぼんやりと映っているだけであり、はっきりと見えません。御霊によって、私たちはキリストのすばらしさを味わうことができます。けれども、完全には見ていないのです。信仰をもって見えない方を見えるようにして見っていますが、それ以上に見ることはできません。御霊の賜物を総動員しても、それはあくまでも天における前味であり、一部であり、完全とは程遠いのです。しかし、イエス様が来られるとき、顔と顔を合わせて見ることができます。ヨハネも第一の手紙で、こう言いました。「 Iヨハ 3:2 愛する者たち、私たちは今すでに神の子供です。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」

そして興味深いのは、「私が完全に知られているのと同じように」と言っているところです。私たちは完全に神について知ることはできていませんが、神には完全に知られています。完全に知られていることを知ることはとても大切です。多くの人は、「私は神についてよく分からないから信じない。神はこの目で見ることにはできないではないか。」と言います。確かに、私たちが神を完全に知ることは出来ませんし、目で見ることにはできません。けれども、神は私たちを完全に知っておられるのです。神は目で見えませんが、私たちをすべて見ておられます。神は、私たちの言うことをお聞きになることができます。また神は私たちに語るすることができます。完全に知ることよりも、完全に知られているところに安心を見出すのです。神が私たちを見張り、見守り、声をかけられ、また私たちの話を聞いてくださる、そのような神を持っています。そして、主が来られれば、私たちも知られているように、主を完全に知ることもできるのです。

3B いつまでも残るもの 13

¹³ こういうわけで、いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。

これが、パウロの結論です。午前礼拝でこの箇所をじっくりと見ましたので、ぜひ後でお聞きください。賜物については、一時的です。それは一時的に与えられた神の恵みであり、本質的なも

の、永続するものは、信仰と希望と愛なのです。聖書を読めば、この三つの要素がひっきりなしに出て来て、主要成分と言ってよいでしょう。そしてこれら三つの中でさらに本質なのは、愛なのです。神は愛であり、慈しみ深い方であり、この方に愛されたので、私たちは愛しています。そして、その愛を兄弟たちに分かち合い、また隣人に分かち合います。

コリントの人々が、もっと大人になってほしいと願って、パウロはこれを書いているのだと思います。霊的に成長するとは、愛によって育てられることです。自分のわがままではなく、主を愛し、兄弟たちの益になるように動くこと。これをわきまえてほしいと願っています。次回は、その実践について見ていきます。愛を追い求め、その中で御霊の賜物を求めます。公の礼拝で、どのように賜物を用いていくのかを、パウロは指導教育をします。